方言に対する社会共有イメージとステレオタイプの形成
～松本清張『砂の器』、氷室冴子『海がきこえる』を資料として～

髙　橋　永　行

はじめに

現実の生活で使われることばとは別に、人々の頭の中にはイメージと結びついたことばが存在する。この二つは位相（語）と役割語に区別して扱われる[注1]。位相語とは、条件の違いにより社会的現実（Reality）に現れることばの様相・差異をいう。一方、役割語とは、仮想現実（Virtual Reality）で用いられて特定のイメージと結びついた話し方で、言語上のステレオタイプ（紋切り型表現）のひとつである。ステレオタイプは、特定のカテゴリーに属する事物に対して定型化したイメージを形作ることであり、言語特徴との密接な関係に基づかずに総体的印象で作り出されるイメージがステレオタイプを形成する。そして、創作物などで形成されたステレオタイプのことば（役割語）が実生活で使われるようになる場合もある。「方言コスプレ」という現象が田中ゆかり（2011）で指摘されたように、役割語が現実社会の言語行動に影響を及ぼすことがあり、ことばとイメージの結びつきをもとにして、現代の言語事象を考える必要がある。

創作物に現れるイメージとしての方言をヴァーチャル方言という[注2]。現実生活でみられる方言（リアル方言）と創作物で使われる方言（ヴァーチャル方言）は同じであるとは限らない。しかし、方言と結びつくイメージは、方言の社会的位置や時代背景と密接に関わる。1950年代以前から1970年代までは「方言コンプレックスの時代」と位置づけられ、とりわけ東北地方のことばは「恥ずかしいもの」という否定的な感覚と結びついていた[注3]。しかし、1980年代を転換期として1990年以降は方言に多様な価値が認められるようになり、2000年代以降はさらに地域資源として活用されるようになる[注4]。

社会に共有された方言イメージと創作物に反映される方言ステレオタイプはどのように関わるのだろうか。本稿では、方言が否定的にとらえられていた時代を描いた作品から松本清張『砂の器』（1960～61）、方言が肯定的にとらえられる現代を描いた作品から氷室冴子『海がきこえる』（1990～91）を

ヴァーチャル方言資料として選び、時代背景と結びついてステレオタイプ化された方言イメージがどのように仮想現実の作品に投影されるのか、検証したい。なお、方言との対比を明確にするため、本稿では標準語という用語を共通語と同等の意味で使う。

1　方言コンプレックスの時代と『砂の器』

松本清張の『砂の器』は、1960～61年にかけて読売新聞夕刊で連載され、同年に光文社から単行本が刊行された推理小説である。1974年には松竹で映画化された（注5）。「東北訛り」、「カメダ」ということばが事件に直結する重要な鍵となり、方言周圏論が解決を導く。『松本清張事典』（1998）、小西いずみ（2005）で述べられるように、「読者に対するトリック」として方言が使用され、謎を解明する根拠として「当時の方言学の成果」が利用されている作品である。しかし、黒崎良昭（2003）、小西（2005）からは、岡山出身の被害者三木謙一がズーズー弁を話すのは長く出雲地方に住んだとしても言語習得のあり方からみて不自然であり、設定に無理があるという指摘もあり、言語学や方言学の立場からさまざまな矛盾や疑問が提示されている。これらは、リアル方言がヴァーチャル方言にどれほど精確に取り入れられているかという観点から考察したものである。小西（2005）は作品中で使われた出雲弁と東北弁を比較検証し、「清張が東北方言と出雲方言を混同していたというわけではない」とする（注6）。

本稿では、前述したように創作物に描かれたステレオテイプの形成という観点から方言イメージについての検証を試みる。小説を主たる資料とするが、映画での描写も参照した。その際、シナリオからの引用ではなく、作品を視聴して発話音声を書き起こした。なお、発話内容が確認できるように漢字仮名交じりで表記する。小説からの引用は【砂N】（掲載ページ）、映画からの引用は【砂C】（冒頭からの再生時間）とする。また、引用例の下線は筆者による。

1．1　東京から見た東北方言のイメージ

被害者の話したことばに対して東京の人がどのような印象を持ち、また評価をしているかを描写した箇所を次に引用する。警察が被害者の身元捜査をする際に、被害者と接した証人に聞き込みをした場面である。

【砂N01】（p7）
　このハイボールにしよう、と言った言葉の調子には、東京弁でないアクセントがあった。すみ子は、客が地方の人、それも東北の方だと瞬間に思った、とあとで警察に述べている。

【砂N02】（p8）
　これは、すみ子がその横を通るとき、ちらりと耳にしたのだが、言葉の調子がやはり東北弁だった。濁音の多い訛（なま）りが耳につく。若い方はそうでもないが、半白頭の人物の発音はひどかった。

「東京弁でないアクセント」から「東北の方だと瞬間に思」い、「濁音の多い訛（なま）り」を聞き取り、「ひどかった」と印象づける。映画でも、若いホステスが「ひどいなまりがありました。」と証言する。

【砂C01】（0：11～）
黒崎警部　：どうして東北弁だということがわかりました（？）
ホステスA：あのぉ　ことばの調子がズーズー弁とでもいうような
黒崎警部　：ことばになまりがある（？）
ホステスB：はい　ひどいなまりがありました

アクセントやイントネーション等（韻律）の全体的な印象から、「東京弁ではない」「ひどい訛り」「ズーズー弁」と連想し、東北弁のイメージと結びつく「濁音の多い訛り」と思い込む。東北のどこかはわからないが、東北のことばというイメージを持ったということである。このステレオタイプの連想が東京の人が持つ共通意識であるということを清張が描いている。
　他の証言でも同じことが聴取される。そして、加害者のことばまでも「東北なまり」があったとイメージ化されてゆく。

【砂N03】（p16）
　捜査本部が、バーの従業員や、当時居合わせた客、それに、バーの外ですれ違ったギター弾きなどを証人として事情を聞いたとき、全部が一致して言ったのは、被害者に東北弁の訛りがあったことである。…中略…
「年配の客が話していたのは、たしかにズーズー弁でした。話の内容は、はっきりとわかりませんが、言葉の調子がそんな具合でした。若い方の言葉は、標準語のよ

うでしたが」…中略…
「カメダは今も相変わらずでしょうね？」被害者の連れは、被害者にそう東北訛りできいた、とバーの女給の一人が話した。
これは、すみ子だけではなく、もう一人の女給も耳に挟んでいた。

【砂N04】（p17）
そのほか、客が彼らの話から小耳に挟んだ片言は…中略…これはおもに被害者の方のズーズー弁の発言で、その連れの男の言葉はほとんど聞かれなかった。

【砂N05】(p18)
いろいろ、目撃した証人の話を聞くと、被害者は東北弁を話していたが、加害者は、ほとんど、ものを言わなかった。…中略…
『カメダは今も相変わらずでしょうね？』というのは、標準語ですが、アクセントに、わずかに東北ふうの感じがあった、とそのトリスバーの女給は証言しています。

以上のように、捜査の進展とともに被害者と加害者が使うことばへのイメージが捜査員の間で収束されていく。そして今西警部補は次のように結論づける。

【砂N06】（p26）
目撃者の話によると、被害者も、犯人らしい人物も、東北弁を話していたという。

バーのホステスが断片的に耳にした被害者のバーでの発話は次のように会話体で回想描写されている。

【砂N07】（p8）
いんや、相変わらず……。だが、君に会えて……こんな嬉スイことはない…
…大いに吹聴（ふいちょう）する……みんなどんなに……

イとエの混同は強調して表記される（下線部）が、特に「濁音の多い訛り」というほどではない。都会人が描いたイメージは、「言葉の調子」から「東北弁だ」というように形成された。

１．２　秋田弁の描写と印象

秋田県羽後亀田（旧岩城町）での会話描写から、東京の二人の捜査員が実際に耳にした秋田弁への印象を取り出してみる。岩城警察署長の会話は、東京から来た客に対して標準語で話そうとしているが、濁音化したことばが混じる。

【砂N08】（p41）
署長は標準語で話していたが、そのアクセントにはあきらかに、この地方独特の調子があった。
「そんなわげで、亀田出身の人間だったら、たいていわがるわげです。」
「ところが、その男は、金なら心配はいらない、前金で払ってもええがらぜひ泊めでくれ、と言って頼んだんだそうです。」

映画では山谷初男氏（秋田県仙北市（旧仙北郡角館町）出身）が「いかにも秋田弁という調子」で演じる。

【砂C02】（0：05～）
岩城警察署長：ほんのちょとしたごどでも目につきますんでほう(報)ご(告)ぐしたんですけンども　おや(役)ぐにた(立)じ(ち)ますかどうか　そのおどごが泊まりましたのは　旭屋といって　この土地でも古いやど(宿)ンや(屋)どやです

捜査員が不審な男について目撃者から証言を得る場面の描写で、うどん屋の主婦の証言のことばは次のように「秋田弁丸出し」で描かれる。

【砂N09】（p48）
「とってもおかしげな人だと思っていだでば。だどもいたずらをするようでもねえから、とがめることもできねえけども、あとで刑事さんがきて、最近、変わったことはねえか、ときかれだので、そのこど話したようなわげでがんす」
「んだな、ずっと、うどんの方を見でるえんた、休んでるえんたよな、わげのわがらないあんべえだした」

映画では、川で布を洗っている中年女性の証言が秋田弁で描かれる。

【砂C03】（0：06～）
中年女性：いやぁ　ときどきねまったり　いや　ち(縮)じこまったり　あっち行った

り　こっち行ったり　うろうろして　おかしげな人でしたなぁ　洗うどごをみでるんだが　みでにゃぁだが　さっぱりわ(訳)げのわがらない人だったなぁ

１．３　出雲弁の描写と印象

今西警部補が現地で感じた出雲弁の描写は次のようである。

【砂N10】（p162）
ディーゼルカーの乗客は、ほとんど土地の人だった。今西はその人たちの話している言葉に耳を傾けたが、確かにアクセントが違う。尻上がりな調子が耳についた。しかし期待したほど強いズーズー弁は聞かれなかった。

島根県三成(みなり)警察署長のことばづかいに対して標準語と変わらない印象を持ち、訛りがないことを問いかけると、署長は「他所(よそ)の人と話すときはできるだけ標準語に近い言葉で話しています」と答える場面がある。

【砂N11】（p166）
「いえ、署長さんのお話を聞いていると、言葉が標準語とちっとも変わりません。この地方でお生まれになったとお聞きしましたが、失礼ですが、そうは思われないくらい訛りがありませんが」…中略…
「わざと、ここらの言葉を使わないだけですよ。今では若い人は、田舎言葉を出すのをだんだんやめているようですね　…中略…　この地方の人は、自分の田舎訛りに気はずかしさを持っているのです。ですから、他所(よそ)の人と話すときはできるだけ標準語に近い言葉で話していますし、…中略…町の近くになると、田舎言葉を話さないようにしています。まぁ、それだけ劣等感を持っているんでしょう。…中略…なにしろ、この辺の言葉をそのまま話すと、ひどいズーズー弁なんです。今では、よほどの山奥か年寄りでないと、そんな言葉は使っていないようです　…中略…亀嵩はここよりは使っているでしょう。あなたにご紹介した桐原さんも年寄りですから、われわれよりは訛りがひどいようです。けれど、あなたがいらしても田舎弁まるだしということはないでしょう」

この「標準語と方言を使い分ける」という意識と行動は、映画では若い警察官を通して描かれる。今西警部補が亀嵩まで車で送ってもらうときの、若い警官の発言を次に引用する。

【砂C04】(0:47〜)
今西：それにしてはあなたはことばになまりというものが全然ありませんな
若い警官：東京の方だから気をつけてるんですよ　土地のもん同士だったらこうはとしより同士の話でも聞かれたらまるでちんぷんかんぷんでしょうな

三成警察署長の発音は、アクセントやイントネーションに出雲弁の特徴がみられ、「一致（えっち）」などのようにイとエの混同やラ行音の欠落があるほかは、濁音化などを強調しない台詞まわしである。

秋田でも出雲でも警察署長や警察官との対話で「方言・共通語の切り替えや使い分け」という言語行動を描く。しかし、年配者は意識の上では切り替わっているが、実際のことばづかいは完全に切り替わっていない。若い警官は映画では標準語を意識でも実際にも使いこなす。

【砂N11】で話題に挙げられた桐原老人の証言には「イとエの混同（習慣（しいかん）など）」や濁音化（だども）、語彙などに出雲弁の特徴が見られるが、映画はこれほどの「なまり」は聞かれない。小説で描かれた桐原老人の台詞と小西警部補の印象を【砂N12】に引用する。

【砂N12】（p167）
「こげな田舎（ざいご）のことでしもんだけん、なんだりあアませんだども、お茶の習慣（しいかん）だけは、昔からのこっちょりましてね、」
（p168）今西栄太郎は、先ほどからそれとなく耳を立てていたが、やはり老人だけに桐原小十郎の言葉には訛りがあった。東北弁とはちょっと調子が違うが、ズーズー弁に似ていることに変わりはない。

１．４　方言に対するさまざまな印象の違い

ズーズー弁は、一般的に東北弁の別称（蔑称）である。いわゆる発音の訛りで、音韻上「し/す」、「ち/つ」、「じ/ず」を区別せずにイ段とウ段が中舌母音で発音され、母音単独のイとエが統合する、もしくは片方が欠落する現象をいう。濁音化して発音する（無声音の有声化）ことをいうのではない。しかし、バーのホステスをはじめ、東京の人がことばの調子から被害者を東北出身だと思い込み、「濁音の多い訛（なま）り」（【砂N02】）と証言するようになる。ホステスの二人が東北出身だったら被害者を「東北出身」とは思わなかったかもしれない。捜査員も東京の人間なので、「東京の人が持つ共有イメージ」が描かれている。

映画では国立国語研究所の桑原技官が次のようにズーズー弁について説明する（小説には描写なし）。

【砂C05】（0：36〜）
桑原技官：たとえば駅売りの呼び声ですねぇ　お寿司に新聞を　おすすぬすんぶんと言えば　これは東京では東北の人の悪口になります　ところが　関西から中国地方にかけては　出雲地方の人の悪口になるんです

また、映画には今西警部補が桑原技官から聞いて理解したズーズー弁に対するイメージが描かれている。

【砂C06】（0：39〜）
今西警部補：カメ（亀）ダケ（嵩）かもしれないけれども　そんなことどうだっていいって言ってた　ズーズー弁ってのは語尾がはっきりしないのが特徴なんだそうだ　だからカメダケにしてもカメダカにしてもだねぇ　ズーズー弁の人が発音するとねわれわれの耳にはカメダに聞こえるっていう

桑原技官が説明している（【砂C05】）ように、東北弁と出雲弁でよく似ているのは発音である。どちらの方言もイ音とエ音の混同がみられる。しかし、カ行・タ行音が濁音化（無声音の有声化現象）し、【砂C02】の「やンどや（宿屋）」のように本来の濁音が鼻にかかった発音になる（渡り鼻音の挿入）という東北弁の特徴は出雲弁にはみられない。文法や語彙については、東北弁は東日本方言的、出雲弁は西日本方言的な特徴を持つので、東北の人が出雲弁を聞いても東北弁だと思うことはない。逆もそうだと考えられる。ただし、東北地方や出雲地方以外の人が聞けば、出雲弁が東北弁のように「聞こえる」ということはあるだろう。そのため、今西警部補に「われわれの耳には」と語らせる。

小説では、東北出身の者は同地方出身者の訛りがわかるということも描かれている。

【砂N13】（p86）
ここまで関川が言ったとき、突然、運転手は別なことを言った。
「旦那は東北の方ではないですか？」
「え、どうしてわかる？」

関川はどきっとした。
「それは訛りでわかりますよ。いくら長く東京にいらしても、土地の者のカンでわかります。ぼくも山形の北の方でしてね、旦那の言葉を聞いて察したのですが、そのアクセントは秋田の方ですな。どうです、違いますか？」

運転手にはアクセント知覚があるように描かれているので「山形の北の方」から出身地を最上地方に設定していると推察できる(注7)。

『砂の器』は、東北に対してのステレオタイプ化した意識を共有する都会の人が東北方言をどのようにイメージしがちなのかという現象そのものを描いた作品である。清張がそのステレオタイプをどのように描こうとしていたのかを考慮すべきで、具体的言語事象の二地点（秋田と出雲）間の方言差を描こうとする意図はなかったのではないだろうか。

黒崎（2003）、小西（2005）は被害者の言語形成期に注目して論じている。しかし、被害者は「困っている人の面倒をよくみて（小説p121）」いた人物であったという養子からの証言をもとに考えると、巡査という職業柄、特に年配者との関わりを大切にし、土地の人に溶け込もうと、被害者が地元のことば（出雲弁）を積極的に習得したという設定にしたと考えられる。外国語の習得と同じことで、言語形成期を経なければ方言の習得ができないということはない。言語形成と言語習得は別という視点を持つ必要がある。

また、映画には加害者と被害者がバーで話し込む回想場面がある。黒崎（2003）は、被害者が加害者に対して「入院中の父を見舞うように説得する場面が終盤にあるが、そこでは一般の人が聞けば間違いなく「東北弁」と思い込むような、かなり強い訛りの方言で語られている」と述べる。しかし、これは今西警部補が事件の概要を想像している場面であり、今西警部補のイメージに沿って方言を被害者に語らせた「ヴァーチャルズーズー弁」とみることができよう。

都会と地方の構図という視点からも、都会の人の意識の根底に流れるものが次の場面に顕著に表れていると考えられる。

【砂N15】（p54）
「やっぱり日本海の色は濃いですね」
吉村は眺めて感嘆した。
「太平洋の方だと…　色が濃縮されたという感じですね」
「そうだな。やっぱりこの色が東北の風景に似合うんだね」

（p56）（羽後本荘駅で）
窓際には、列車と見送り人との交歓が随所に行なわれてる。今西はぼんやりそれを眺めていた。会話はこの辺の訛り言葉で、はっきりと意味がわからなかった。

この場面は映画では秋田の海岸で次のように描かれる。

【砂C08】（0：17〜）
吉村：色が濃いみたいですねぇ　太平洋の方だともっと浅いですよ　何か濃縮された感じだなぁ
今西：東北なんだなぁ

地方（田舎）に対するイメージがそのままことばについてのイメージに重なってゆく。都会と地方の縮図が垣間見られる。1970年代までは、都会は地方を「田舎」と見て、地方は都会をあこがれる時代でもある。

古く創作物において方言ステレオタイプを取り入れた作品には、江戸時代に刊行された式亭三馬『浮世風呂』前編巻之上がある（注8）。男湯之巻に登場する田舎出身の下男（三助）の会話には、格助詞サや「半分（ふはん）」などハ行唇音表記を用いるなど、「東北弁らしい」ことばを話させる。しかし、「ガ行鼻音ではない」発音をさせることで当時の江戸語とは「違うことば」であることを強調するなど、東北方言だけではなく新潟方言の特徴もみられ、「総体的な田舎ことば」をイメージしていると考えられる。

『砂の器』には地方の根底に流れていた「恥ずかしい、隠したい」コンプレックスの地域格差が描かれている。「典型的ないなかのことばというイメージを与える言い回し」（注9）を効果的に使用して、ある種のステレオタイプな方言イメージを形成し、それを読者に共有させることで「方言と出身地がずれる」ことを示した作品である。

2　方言スタイルの時代と『海がきこえる』

現代の方言は、時と場合に応じて標準語と使い分けられるというスタイルの一種ととらえられ（注10）、イメージを創出する言語（注11）と位置づけられる。次に、創作物に描かれた「方言と標準語の切り替え」について検証したい。

氷室冴子の『海がきこえる』は、1990年１月から91年12月まで『アニメージュ』（徳間書店）に連載され、93年に単行本が刊行された青春小説である。

同年５月５日にアニメーション作品化され、日本テレビ系列で放送された[注12]。高知に生まれ育った杜崎拓と東京から転校してきた武藤里伽子が高校卒業後に東京の大学へ進学し、再会する。二人の出会いから「いま」までの回想を織り交ぜて、高校時代から続く二人の不器用な関係を描く。里伽子は標準語を使い続けるが、拓は高知では高知弁で話し、進学後は標準語で話す。

著者は北海道出身で、小説のあとがき（p271）には「会話などのコトバ指導、取材などでは、高知在住の古川佳代子さんにお世話になりました。」と謝辞が添えられているので、高知弁ネイティブではない。アニメ作品の方言指導は渡部猛、島本須美の両氏が担当した。ナレーションは主人公拓自身の口から標準語で語られる。作品が描かれた年代は、小説（p182）でプロ野球ヤクルトの試合（神宮球場）に池山、広沢の両選手が出場している場面が描かれていることから、作品が刊行、放送された当時とほぼ同じである。

こちらも小説を主たる資料とし、アニメ作品も一部使用した。その際、シナリオからの引用ではなく、作品を視聴して発話音声を書き起こした。なお、発話内容が確認できるように漢字仮名交じりで表記する。小説からの引用は【海N】（掲載ページ）、アニメからの引用は【海A】（冒頭からの再生時間）とする。また、引用例の下線は筆者による。

２．１　相手のことばへの方言意識

拓と里伽子がお互いのことばについてどのような印象を抱いたかをまず確認する。高校２年生の修学旅行先（ハワイ）で初めて二人だけで会話を交わしたときの場面である。小説とアニメの描写を次に引用する。

【海N01】（p80）

「ねえ、気を悪くしないでね。土佐弁のイントネーションて、ちょっと時代劇みたいね。ほら、坂本龍馬なんかがでてくる幕末の」…中略…

（p82）里伽子のしゃべり方には、ぜんぜん土佐ふうの匂いがついていない、いわゆる東京コトバで、ぼくは少しばかりドギマギした。

そんなのはテレビでさんざん聞いていたし、ぼくらだって、出るところへ出ればデスマス体でしゃべる。標準語と地方語といったところで、そんなに違いはないと思っていた。

しかし目の前でペラペラとまくしたてられて、思っていた以上に、びっくりしてしまった。うまくいえないが、ニュアンスがぜんぜん違うのだ。…中略…

（p83）「東京弁て、ケンカ売りゆうみたいやな」…中略…

（p84）「私が悪かったわ。時代劇っていったの、バカにしたんじゃないのよ。でも、ほら、ドラマなんかで、わざと地方のコトバつかうの、あるでしょ。あんな感じがしたんだ。バカにしてるつもりじゃなくて、びっくりしただけ。」…中略…
「言葉ってやっぱり、大切ね。耳になじむまで、相手がなにいってるのかわからなくて。何度も聞き返したりして、すっかり嫌われちゃったみたいだしさ」

【海A01】（0：21～）
里伽子：ふふ　ごめんなさい　土佐弁のイントネーションて　ちょっと時代劇みたいね　ねえ 座らない　…中略…
拓　：東京弁て　なんやケンカ売りゆうみたいやな　…中略…
里伽子：もうやめてよ　私が悪かったわ　別にバカにしたんじゃないのよ
　でも　ドラマなんかで　わざと地方の言葉使うのあるでしょ
　ああいうの　現実には　もうないと思ってたんだ
　なのに高知に来たら　みんな平気で喋ってるんだもの　びっくりしちゃった
　でも 時代劇って言ったの今が初めてよ　そう思ってたけど誰にも話してないわ
拓　：うん その方がええ
里伽子：うん　言葉ってやっぱり大切だわ
　耳になじむまで 相手が　何言ってるのか わからないんだもん
　何度も聞き返したりしてたら　すっかり嫌われちゃったみたい

小説とアニメは、ことば遣いが若干違うだけで会話内容に差はない。里伽子は高知弁を「時代劇みたい」と評し、拓は標準語を「ケンカ売りゆうみたい」という印象を持つ。小説では、「ぼくらだって、出るところへ出ればデスマス体でしゃべる。標準語と地方語といったところで、そんなに違いはないと思っていた」が、「ニュアンスがぜんぜん違う」という内面描写がある。

２．２　使用語の切り替えと意識

東京育ちの里伽子は標準語だけを使うので、ことばを切り替えない。一方、拓は高校３年生の時、東京のホテル室内で里伽子と二人だけで会話する場面で高知弁を使うが、東京の大学に進学した後は、場所や相手により使用することばのスタイルを切り替える[注13]ようになる。次の【海N02】【海A02】は高校３年生の時に東京のホテル内で里伽子と交わした会話である。特にアニメでは、高知にいるときと変わらずに高知弁を使い続ける。

【海N02】（p149）
「杜崎くん、このあとどうする？このあと、したち映画とか、いくかもしれないけど。外出するんなら、キー、フロントに預けといてくれる？」
「うん。けど、まあ、ちょっとひと眠りするわ。ちゃんとした寝床で横になりたいし」…中略…
「ぼくはぼくで、勝手にやるから。武藤は気にせんと、楽しんでこいよ」

【海A02】（0：42〜）
里伽子：杜崎くん　外出する（？）
拓　：部屋で寝ゆうき　かまわんちゃ
里伽子：ほんと（？）　悪いな
拓　：気にせんと　楽しんで来（き）いや

また、周りにほかの客がいるホテル１Ｆのティールームの場面でも、アニメでは里伽子と岡田（里伽子の元彼）に向かって高知弁を使う。小説では拓は二人に対して一言も発しない。

【海A03】（0：45〜）
拓　：何が子どものこと考えろじゃ　中学生じゃないろうが
　　まったくくだらんちゃ　おまえもそっちの男も

しかし、大学入学後、拓は東京では標準語だけを使うようになる。東京四谷のビストロで再会して以降の里伽子との会話を次に引用する。

【海N03】（p195）
「大学の先輩が、パーティーに手伝いに来いっていうからさ。ほら、賞とった美大のマミちゃんとかいう人。あの人の高校んときの親友だってさ」

【海N04】（p233）
「ぼくは八月にはいったら、高知に帰るけどさ。里伽子も来ないか。ヒマなら」

【海A01】に「出るところへ出ればデスマス体でしゃべる」とあるように、拓は里伽子と変わらない標準語で自然に会話している。
里伽子が腕をからめて来て、「あたし、杜崎くんが好きなのかもしれない」

と言われて心が動揺している場面でも、拓は標準語で返事をして方言が口から出ない。

【海N05】（p235）
「武藤はいま、淋しいからだよ。せっかく東京にもどってきたのに、うまく居場所がみつからなくて、淋しいんだ。だから、溺れる者はワラをも掴むってやつで、ぼくで手を打とうとしてんだよ」

東京では完全に標準語を使いこなすのであるが、１年の夏に高知へ里帰りし、空港で親友の松野と再会した場面では、自然に高知弁に切り替わることを自覚する。

【海N06】（p236）
「やっぱり、きてくれたがか。やったね」
松野の肩をこづいていったものの、そのとたん、自分から笑い出してしまった。
（p237）「いや、ここの空港ついたら、すぐに高知のイントネーションになってんのが、おかしくてさ。なんなんだろ、これ、ヘンな感じだぜ」
「おまえなんか、いいよ。おれ、京都だろ。京都弁て、エネルギーあるから、ひっぱられるんだ。ウチに帰ってから、イヤミいわれっぱなしだぞ。アクセントがヘンだって」

『砂の器』ではことばを標準語に切り替えても「方言らしさ」を聞き手に感じ取られてしまうことが描かれる（【砂N08】）。これは標準語（話者）の優位性である。一方、『海がきこえる』では拓が標準語を話しても聞き手（東京の人）に違和感を持たせることなく、完全に切り替えできることが描かれる。方言は標準語と対等の関係にあると言える。方言コンプレックスの時代は、恥ずかしいから標準語を使う意識はあっても、実際には訛りが隠せない（特に年配者）ので、それを聞く側（標準語話者）はことばの優位性を感じることがある。しかし、ことばを使い分けるというスタイルになった現代は、実際に使い分けられるので、むしろ対等の関係にある時代だと言えるだろう。

方言ステレオタイプは言語のステレオタイプの一部であり、言語の心的カテゴリーの重層化が一般的になったことが背景にあると考えられる。

3　アコモデーション理論からみた使用意識

次に、創作物に描かれた登場人物の言語行動をアコモデーション（相手によって話し方を調節すること）の視点から考察を加えてみたい[注14]。

石黒圭（2013）は「第三者がアコモデーションによって聞き手の言語共同体に入るのは意外と難しい」（p109）と指摘する。『砂の器』では、岩城警察署長が相手のことば（標準語）にあわせて標準語を使おうとしたが、聞き手（東京語話者の今西警部補）は「独特の調子があった」（【砂N08】）という印象を持つことが描かれる。

また、『海がきこえる』では、里伽子が「言葉ってやっぱり、大切ね。耳になじむまで、相手がなにいってるのかわからなくて。何度も聞き返したりして、すっかり嫌われちゃったみたいだしさ」（【海N01】）と拓に語るところから、転校してまもないとき高知弁を話すクラスメートからなかなか仲間として受け入れてもらえない疎外感を持ってしまうことが描かれる。そして拓はなかなか友だちができない里伽子に気を遣うようになる。

半沢康（2003）は、「共通語が普及して方言との使い分けという言語行動が一般化した結果、現代の方言は「仲間内で肩ひじを張らずにくつろいで話す」場合のことばという役割を担うようになった。方言で話すことにより、同じことばを共有する相手との仲間意識を確認し、心的距離を縮めることが出来る。」と述べる。使い分けという言語行動は、仲間と認識しない（共有できない）場合は相手に対して排他的な感覚を持つということでもある。

方言と標準語は別の言語であるとする言語意識はいずれの時代も強く社会に根付いていることに違いはない。方言を使わない（標準語で話す）という言語行動は、相手の共同体に入っても、敬語と同じく心的距離をとることである。『海がきこえる』では、クラスメートが一様に東京からの転校生里伽子に方言だけで話しかけることをするが、これは現実的に起こりうる行動といえるだろうか。拓のように「出るところへ出れば」使えるのであれば、標準語を使うのが一般的な言語行動である。しかし、創作物だから「その後の決まったストーリーにあわせて」ステレオタイプ化した言語行動を描いたとも考えられる。そうすることで、井上史雄（1994）で述べられた、一定の領域で生じる「集団帰属意識」をクラスメートが持ち、それに入っていけない里伽子は疎外感を持つことになるという設定が生かされるのだろう。

むすび

上田萬年（1896）は、実社会における言語的位相に言及し、「新たに発達すべき日本の標準語」は「現今の東京語」が「名誉を享有すべき資格」を持つが、東京の「ベランメー言葉」ではなく、「教育ある東京人の話す言葉」とする。標準語は「方言なる者とは事かはり」、「模範として」用いられる言語であるとする考えに基づく。この規範が方言のコンプレックスを生み出したが、現代は誰もが「使えるという意識」を持つようになり、スタイルの一種へと変わる。しかし、誰もがスタイルを着こなせるわけではない。

また田中ゆかり（2012）は、山形県三川町調査から「「京都」におけるポジティブなイメージ語との結びつきの多さは、三川町の方言が属する庄内弁が京都方言由来の語彙などをもち、庄内地方は文化的にも京都の影響を受けているという考え方がある程度浸透していることの反映と考えられる」と述べ、「地域特性によらない日本語社会に共有される方言ステレオタイプが存在する」と結論づける（下線は筆者による）。これは現実社会での調査によるものであるが、社会に共有されたイメージはステレオタイプを形成し、それが創作物に投影される。『海がきこえる』で拓の親友、松野が「京都弁て、エネルギーあるから、ひっぱられるんだ。」（【海N06】）と語る場面があるように、「京都弁は方言の中でも周りに強い影響力を持つ」というステレオタイプが創作物にも存在すると言えるだろう。

方言だけではなく、社会言語のいたるところに「共有／非共有」は存在する。とりわけ否定的な感覚は自覚しやすいので、社会に根ざした共有イメージは個々人の言語行動にも影響を及ぼすようになる。もちろん、実社会とは異なる設定が描かれることには注意が必要であるが、創作物にはその時代のステレオタイプ化された言語イメージが投影されるのである。

注1　金水敏（2003）は、次のように述べる。

言葉の位相（差）は、「現実」（リアリティ）における様相・差異を学者が研究することによって得られるのに対し、役割語は、私たち一人一人が現実に対して持っている観念であり、いわば「仮想現実」（ヴァーチャル・リアリティ）なのである。　…（略）…　位相・位相差は、研究者がフィールドワークや文献の調査等の手続きを経ることでようやく明らかになるもので、一般の日本語話者には見えていないことが多いのだ。

むしろ一般の話者が知識として持っているのは、役割語の知識なのである。(p36)

注２　田中ゆかり（2011）は、次のように述べる。

「らしさ」を頭の中で共有するホンモノとは別の「方言」のことを「ヴァーチャル方言」と呼ぶことにする。(p4)

注３　柴田武（1958）は「Ⅳ 方言コンプレックス」で次のように述べる。

実際には、ズーズー弁だけがおかしいように考えられている。

東北のズーズー弁は、音声が東京共通語と著しくちがう。…（中略）…

音声がちがうと、話の続いている間、異様な感じを受ける。ときに笑いを誘われることがある。

注４　井上史雄（2000）では、方言にさまざまな価値が認められるようになった背景が解説されている。(p152～187)　木部暢子他（2013）では、地域資源として活用される方言の実態について紹介されている。(p104～107)

注５　作品の概要を次に紹介する。映画では、監督は野村芳太郎氏、脚本は橋本忍と山田洋次の両氏が担当した。

国鉄（ＪＲ）蒲田操車場で、男の他殺死体が発見される。被害者は前日の深夜、蒲田駅近くのバーで、連れの客と話しこんでいたことが判明する。バーの従業員の証言によると、被害者は東北訛りのズーズー弁で話し、「カメダ」と言っていたという。

今西警部補は、秋田県に「羽後亀田」（秋田県由利本荘市、羽越本線の駅）があることに気づく。付近に不審な男がうろついていたとの情報を得て、今西は吉村刑事と共に現地へ赴くが、何の手がかりも得られない。

捜査は行き詰まったが、被害者の家族からの申し出から、被害者は三木謙一であることが判明する。岡山県在住であり、三木が東北弁を使うはずがないと言う。しかし、今西は国立国語研究所の桑原技官から、島根県出雲地方は東北地方と似たズーズー弁を使用することを教えてもらい、島根県の地図から「亀嵩（かめだけ）」の地名を発見する。しかも三木謙一は元島根県警の亀嵩駐在所巡査部長であったこともわかる。今西は出雲へ現地調査に赴く。

注６　小西（2005）は、「羽後亀田の人物の台詞には「今がら一週間ばがり前に」「その男が着いだのは」「グウグウ寝でいだそうです」など、カ・タ行

子音の有声化も現れているのに対して、亀嵩の人物の台詞には「習慣（しいかん）」「巡査（じんさ）さん」「駐在所（ちいざいしよ）」「そうでしね」など、「ズーズー弁」的な特徴は見られるものの、無声子音が有声化する現象は見られない。台詞の方言特徴を見る限り、清張が東北方言と出雲方言の共通点・相違点を混同していたというわけではなさそうである。」とするが、『砂の器』（p7）の「濁音の多い訛り」という表現を取り上げ、出雲方言は「「ズーズー弁」的特徴は東北方言と共有しているが、語中でカ・タ行子音が有声化するという特徴は持っていない」ことから「濁音の多い訛り」と描写するのは不適切であると指摘する。

注７　平山輝男（1957）では、山形県最上地方を東京式音調Ｉとする。

注８　『日本語学研究事典』（2007　明治書院）では「田舎者の言葉の類型的表現にとどまっている」と述べられる。また、真田信治（1991）は上方ことばに対して「作者の三馬自身も江戸ことばの優位を主張」し、徳川宗賢（1978）は「一種の言語的プライドといったものを語らせている」と述べるように、江戸対上方の構図は地方の劣位を印象づけると考えられる。

注９　大西拓一郎（2016）p130参照。

注10　加藤正信（1974）参照。

注11　木部暢子他（2013）参照。

注12　監督は望月智充氏、脚本は中村香氏が担当し、制作はスタジオジブリによる。

注13　アニメは高校生の時を描くので高知弁だけを使う。

注14　石黒（2013）はaccommodationについて「話し手は、聞き手との親しさを示すために、聞き手の使っている言葉に同調させ、そこに自分の言葉を収束させていく」言語行動と規定する。

参考文献

上田萬年（1896）「標準語に就きて」『國語のため』冨山房
柴田武（1958）『日本の方言』岩波文庫
平山輝男（1957）『日本語音調の研究』明治書院
加藤正信（1974）「現代生活と方言の地位」『言語』3-7　大修館書店
徳川宗賢（1978）『日本人の方言』筑摩書房
歴史と文学の会編（1998）『松本清張事典』「方言」勉誠出版

小西いずみ（2005）「松本清張『砂の器』における「方言」と「方言学」」『都大論究』42
黒崎良昭（2003）「松本清張『砂の器』におけるズーズー弁の不思議」『園田学園女子大学論文集』38
半沢康（2003）「第10章　現代の方言」『ガイドブック方言研究』ひつじ書房
田中ゆかり（2011）『「方言コスプレ」の時代　ニセ関西弁から龍馬語まで』岩波書店
田中ゆかり（2012）「イメージ語からみた方言ステレオタイプ－山形県三川町調査・首都圏大学生調査・全国方言意識調査から－」『語文』142　日本大学国文学会
金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語　役割語の謎』岩波書店
石黒圭（2013）『日本語は「空気」が決める』光文社新書
永瀬治郎（2015）「方言イメージの形成」『専修国文』96
真田信治（1991）『標準語はいかに成立したか　－近代日本語の発展の歴史』創拓社　第二章　町人たち日本語談義〔近世〕
井上史雄（1994）『方言学の新地平』明治書院
井上史雄（2000）『日本語の値段』大修館書店
木部暢子・武田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ（2013）『方言学入門』三省堂
大西拓一郎（2016）『ことばの地理学　方言はなぜそこにあるのか』大修館書店

資料

小説　松本清張『砂の器』　1961年　光文社
BD）松竹ブルーレイ・コレクション『砂の器』松竹（2014年10月３日発売）
小説　氷室冴子『海がきこえる』　1993年　徳間書店
BD）『海がきこえる』スタジオジブリ制作　ウォルト・ディズニー・ジャパン販売（2015年７月17日発売）